

分野横断型大学院教育システムの挑戦

久野節二

人間総合科学研究科教授 感性認知脳科学専攻長

はじめに

新しい学問領域が産声をあげようとするとき、これまでの日本の社会は、そして社会に対して先導的な意見を提言する立場にある大学は、その折々でこの挑戦的で、先進的な学術活動の本質をしっかりと認識し、新しい学問の芽生えを育むために自らの包容力と実行力をどれだけ発揮してきただろうか。大学がこの社会を基盤として成立している以上、その活動は社会状況を反映した国民世論と大学のおかれた現実的状况による制約をその時々で少なからず受けるだろうし、大学自らが掲げてきた教育や研究の理念に沿った考え方に自ずと規定されるだろう。しかし、旧来の観念に拘泥した固定的な、あるいは目先の事象に捕われた現実論的な発想だけでは、たとえ安定した状況が短期的には得られても、相応の時間と学術的な環境が必要な新しい学問分野の創成など夢のまた夢に終わってしまうに違いない。

仮に大学が、その独自性やアクティビティを評価するための客観的な尺度の一つとして創造性を掲げるのであれば、新鮮で自由な思考と柔軟な発想を促す斬新な学術的プラットフォームの構築、多彩な構想を具現化するために相応しい研究者の戦術的な組織化、さらに創造された知的所産を次世代へと確実に継承し、更なる創造性を培うための実効性の高い教育システムの構築とその基盤整備に絶え間ない努力を傾けていくことが不可欠である。自然科学の歴史において、オリジナリティの高い研究にそれぞれの時代で必ずしも最高の評価が与えられなかったという事例のいくつかは、研究活動に対する正当な学術的価値判断を下すことの難しさを端的に示している。新しい学術活動の発芽は、それを新しい芽として正しく認識できるだけの洞察力や判断力が発揮されなければ簡単に摘み取られてしまうだろう。この若芽を育み、大きく成長

させるための第一条件は、大学においては組織全体の統合した力であり、この潜在的組織力の大きさは大学院機構をどのように設計し、どのように具体化するので決まると思う。

異分野横断型教育システム構想

筑波大学が各学問分野に対応した縦割り型大学院教育体制を見直し、6つの博士課程大研究科からなる新しい教育システムへの再編を完了して早くも4年が経過した。この大学院の再組織化は、研究主体に活動する大学として法人化後の本学が歩もうとする基本路線に沿ったものであり、この組織改革の特色の1つが異分野を横断した教育システム構想である。そして、この大きな大学院教育改革の流れの中で誕生した大研究科の1つが人間総合科学研究科である。この構想の背景には、固定的観念に捕われることなく、合理性や効率性に重点を置いた組織づくりを目指すという本学の基本姿勢がはっきりと窺える。このような組織づくりの考え方の善し悪しについての議論は置くとして、この大学院の改組再編は、先進的かつ挑戦的、別の言葉で表現するならばある意味で実験的な大学院教育システムの組織化として位置づけることができるだろう。このような分野横断的な構成を特色とする人間総合科学研究科構想においては、

異なる学問分野の極めて大胆な出会いを実現させ、異分野研究者の交流を推進させることで、このヘテロな学術集団の活動の中から将来、異分野融合による新学問分野が創成されることを期待して、プラン設計がなされている。例えば、芸術学と医学をそれぞれ専門とする研究者が同じ大学院博士課程の教育組織内で活動するという構図は、国内の他大学のどこを見ても例がなく、普通に想像できる文理融合の枠組みをはるかに越えた研究体制と大学院博士課程教育システムが、この研究科においては現実に稼働している。実際、大学院博士課程の学生は、異分野の教員同士が共同研究を推進していく研究現場の状況を入学当初から実体験することで、異分野の集合という特別な状況に違和感をもつことなく、これをごく自然のこととして受け入れている。一見奇抜とも思われる異分野集合体としての大学院の組織化は、旧来の学問体系を堅持しようとする立場から見ればその設計理念の理解に苦しむところであろうが、見方を変えればその判断は一変すると思う。法人化され、独立採算制というこれまでの国立大学には未体験の新環境において、これからどのように生き残りを図っていくのかを模索しているときに、可能性と発展性を秘めた構想を、近視眼的判断のもとに切り落とすのでは、将来の展望は見えてこない。新し

い研究分野を創成し、それを本学から世界に先駆けて発信するためにはそれ相応の時間的な、そして経済的な支援が必要であり、俯瞰的・長期的視点に立った大学の実効性の高い支援体制の確立が必須ではないかと思う。

感性認知脳科学専攻が目指すもの

本専攻は研究科発足時に新設された3専攻の1つとして誕生した。設置当初に3つの純増教員枠が本専攻に配置されたことは、筑波大学の分野横断型大学院教育という新しい構想への大きな期待の現れであり、その責任の重さを痛感している。本専攻には従来の学問分野で言えば芸術学・心理学・心身障害学・基礎医学・臨床医学の教員が集結し、「感性」という人間の高次脳機能を遺伝子・分子・細胞のレベルから一人の人間、さらには対人関係に至るまでの種々のレベルにおいて、比較認知科学・行動神経科学・システム脳科学・脳型情報処理機構学(連携大学院)・神経分子機能学分野における基礎科学的研究と感性情報学・神経機能障害学分野の応用科学のおよび臨床医学的研究が展開されている。平成15年度には、本専攻が中核となって申請した21世紀COE拠点形成プログラム「こころを解明する感性科学の推進」が採択され、大学院総合研究棟Dを活動基盤として、実際に「感性」に関連したいくつかの融合研究の成果が得

られ始めている。採択時のある報道機関による調査では、このプログラムは企業が注目するCOEプログラムの上位にランクされ、人間のこころに関する研究において分野横断型の研究体制と大学院教育システムによって得られる成果に、日本社会が大きな期待を寄せていることが示された。“科学の発展と技術革新は人間にとって幸せをもたらすもの”という考え方を強力に推進させた結果はいま、社会・環境・教育・医療・産業など人間生活の多くの局面で、人間性への思慮の足りなさ起因する多くの矛盾を露呈している。しかし、ユビキタスコンピューティング・遺伝子操作・ナノテクノロジーなど、技術の開発と進歩は今まで以上にめまぐるしい。これらの新技術は、人間に新しい形の幸せをもたらすとはいえ、さらに新たな矛盾を生み出す“両刃の剣”である。現代は、科学技術の発展によって生じた社会の矛盾を解決するために、多くの人たちが新しい方法論による人間やこころの研究に期待し、その成果に活路を求めている時代である。本専攻では、「感性」を人間のこころの側面として捉え、包括的なこの高次脳機能に関する異分野横断型研究を通して、人間性やこころを原点として考え、それを具体化できる人材の育成を目指した大学院教育に挑戦していきたい。(ひさの せつじ/システム脳科学)